

# 1970年

上げた。

九月、国慶二十一周年を慶祝する日中文化交流協会代表団が訪中した。毛主席は、十月一日、天安門城楼で中島健蔵団長と会見し「日本における日中友好団体の団結のために努力されている中島先生を支持します」と語った。



毛沢東主席は周恩来総理とともに、10月1日、天安門城楼において、中島健蔵理事長と会見し、「日本における日中友好団体の団結のために努力されている中島先生を支持します」と語った

大阪で万博が開かれ、日航よど号ハイジャック事件、三島由紀夫の自決など、国内は騒然とした。アメリカは戦火をインドシナ全域に拡大した。中国は初の人工衛星を打ち上げた。

これは、当時、日中友好団体に意見の分岐が現れ、武闘も行なわれていた状況の中で、両派の団結を促した当協会に、中国側が賛同の意を表明したものである。特に「文革」のため、長年、世界卓球選手権大会に参加していなかった中国卓球選手団が、翌年の三月に名古屋で開催される第三十一回世界大会に参加できる環境を整えることについて協議した周総理と中島理事長との会見は、その後当協会が、いわゆる「ピンポン外交」と称された一九七一年のアメリカ卓球選手団の訪中、キッシンジャーの訪中、一九七二年のニクソン

訪中、日中国交正常化へと続く、歴史の転換に大きな役割を果たす契機になのである。

## 七〇年の主な交流

◎2月 映画「夜明けの国」十六ミリ普及版完成。

◎4月 当協会と日本国際貿易促進協会は「在日中国人の広州交易会全員参加を要求する懇談会」を開催、百三十一氏による同題旨のアピールを採択。

◎6月 前年の記録映画「三里塚の夏」に続き「三里塚の冬」一般公開。

◎7月 東京の朝日講堂で「七・七盧溝橋事件三十三周年記念講演と映画の会」、朝日新聞社と日中文化交流協会

が主催、中島健蔵理事長、安藤彦太郎、尾崎秀樹、吉村公三郎の諸氏が講師、映画「太行山麓の新愚公」を上映。中国船就航六周年を記念し、飛鳥田一雄

横浜市長がパティ。藤沢で轟耳没後三十五周年記念行事、白石凡常任理事が記念講演。

◎8月 東京文化会館で松山バレエ団「白毛女」公演、日中文化交流協会主催

(十月に大阪、十二月に福島でも公演)。北京に長期滞在していた西園寺公一氏

(当協会常任理事)が帰国。二つの中国を推進した「アジア通信連盟」総

会を糾弾、中島健蔵理事長が「声明」を発表。

◎9月 慶祝国慶二十一周年・日中文化交流協会代表団(団長・中島健蔵理

事長、副団長・白石凡、秘書長・白土吾夫、清水正夫、和田敬久、栗木安延、

荻村伊智朗の諸氏)訪中。

◎10月 中華人民共和国建国二十一周年を記念し、「日中問題講演会」を東京と大阪で開催、朝日新聞社、日中文化交流協会主催。

一九七一年四月、名古屋で開催された第三十一回世界卓球選手権大会の際、中国はアメリカ卓球チームを直ちに中国に招待し

中米卓球試合を行なう旨をアメリカ側に伝えた。文革の最中、中国が国際舞台へ登場する、いわゆるピンポン外交の最高潮である。ここに至るまでに、

中国の大方針とその周辺で努力する多くの集団と個人があった。「歴史における個人の役割」は、たとえば、日本卓球協会の後藤鉦二会長の決断の連続に見ることが出来る。

当協会は、一貫して、後藤会長の決断を補佐し、事態の円満な進行に努力した。重要なことは「参加の論理」である。広範な人士に、行きがかりを捨て、歴史の歯車を押し進める大事業に参加してもらったため、中島健蔵理事長を先頭に活発に活動した。「ピンポン外交に私は寄与した」と言う人が多いのは、この「参加の論理」に基づくものであり、結果は成功したと言えるだろう。

一九七〇年十月七日、中島氏に周総理が「後藤鉦二先生はわれわれの友人です」と言明したとき、一九七一年のピンポン外交の展開に導く環境作りは

頂点に達した。

(九十九)